
真・恋姫無双 孫呉の為に...ていうか雪蓮の為？いや歪んでるからよくわからない作品。

携帯談話

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 孫呉の為に…ていうか雪蓮の為？いや歪んでるか
らよくわからない作品。

【Nコード】

N1955V

【作者名】

携帯談話

【あらすじ】

始めに言います。この作品は作者が夜のバグったテンションでその時呼んでいた小説の影響を受けまくった作品です。何が言いたいのかとかは全くわかりません。一応言っと、主人公はよくわからない思考の持ち主です。

（前書き）

ええ、この作品は携帯が夜風呂から上がった後になんか書くかというテンションで書いたよくわからないものです

というかこんなものを書くならちゃんと連載のほうの続編書けとか言われてもしようがないですねw

この前友人87号30に言われましたしww

後、この作品は何が言いたいのかわかりません。
気分が悪くなるようでしたら戻るボタン推奨であります

私に名は無い。

いや、あつてはならない。

私は孫呉を守る為、孫呉の為に『私』になった。

何故私が『私』となったかは少し話さなければならない。

私がまだ『私』になる前、私は孤児だった。

賊により村を焼かれた。元々親には捨てられ、運よくその村の村長に拾われ、育てられた。

村人からは嫌悪の眼、同年代の者からは奇異の眼を向けられた。

当然だろう。私には眼が無かったのだから。

それでも何も変わらず普通に生活できた私が恐かった、あるいは気味が悪かったのだろう。

辺り前だが村人は私を迫害した。

始めは私をかばっていた村長も、村人の圧力に耐えられなかったのか、私を村から隔離した。俗に言う村八分というものだ。

そして、数年がたったある時、村が賊に襲撃された。

私を隔離し、迫害したと言っても私にとっては家族も同然だった。

眼の見えない私が生活できるようになるまで私をかばい続けてくれた村長。隔離された頃から私の所に来て武を教えてくれた女の人。私を迫害しながらも村の一人と数えてくれた村人。全てに感謝していた。

それなのに、賊は彼等が無残にも殺したのだ。

私は視覚を失っている為故にか、その他の五感が発達している。特に発達しているのが聴覚と触覚だ。

異常ともいえる発達をした私の聴覚と触覚は音は三里先の木々の擦れる音を聞き分け、身体は風に含まれる塵の一粒一粒を認識する。

私は直ぐに異変に気付いた。その日は身体の調子が悪く寝込んでいたのだが、村の方角から聞こえた悲鳴にとび起きた。

発達した聴覚を全力で使用し、大まかな事の事態を把握すると、私は家を飛び出た。

走った。これでもかという程に。足がちぎれるのではないかと思う程の速度で走った。

しかし、村に到着した時には全てが終わった後だった。

始めの頃だけだが、優しくしてくれた農家の夫も、村長の家族も、全てが聴こえなかった。

しかし、次の瞬間いやでも耳に入る音がキコエてきた。

それは、最後まで私をかばってくれた村長の断末魔。

三里離れた所にある木々の擦れる音すら聞き分けるこの耳はその音を脳髓に直接叩きこんできた。

その瞬間、私の中の何かが切れた。

私は腰に佩いていたかつて武を教えてくれた女の人から貰った短刀を抜くと賊の音へと近づいていき、殺した。

通常の人間ならばその瞬間に不快感が襲ってくるのだろうが、生憎私は眼が見えない。噴き出す血の飛沫を感じる事はあっても血の色、不気味な程鮮やかな赤を見ることはない。

その為だろうか、賊の肉を逆手に持った短刀で斬り裂く感触が酷く思考を満たした。

皮膚をまるで熟れきった果実に指をさしこむかのような感触で斬り、その先にある皮下脂肪を蒟蒻を握り潰すかのように引き裂き、筋肉を繊維を一つ一つまるで中華蕎麦の麺を引き千切るかのように寸断し、骨を槓を割るかの様に、断つ。

その感触が酷く好ましく思えた。

更に、その場にいた他の賊を同じ要領で首を落としていく。

その感触は酷く甘美だった。今までに無い程に。

そして、夜が明けた。

遠くから馬の蹄の音がする。

その中には聞きなれた身体の音もした。

その頃、既に私は人から発せられる筋肉の動きの音は呼吸音、また足音などによって個人を特定していた。

そして、馬に跨り此方に一直線に向かって来ているものの中に聞きなれた音があったのだ。

それは私に武を覚えてくれた者の発する音だった。

音が近づいてくる。

目の前まで来た。

人数は数十人だった。

細かい人数は覚えていないが、この後に私にとって大きな事があったのは忘れられない。

武を覚えてくれていた女性が私に気付いて近づいてくる。

「おお、無事だったのか・・・」

そう言って私の名を呼ぶ。

「祭？ どうしたの？」

ふと、女性、祭の後ろから声がする。

私はそちらに意識を向ける。

瞬間、私は意識を奪われた。

そう、奪われたのだ。

眼の见えない私は普段から周囲に意識をまんべんなく放っている。それにより自分の周りで何が起きているのかを把握しているのだ。故に意識を一つの所に集中させる事など無い。

だが、この瞬間は奪われたのだ。

何故か？ 簡単な話だ。

それは私の世界に初めて色が出現したのだ。

私は眼が見えない。故に？ 黒？ という色以外も見た事が無い。そもそも？ 黒？ という色すら今は亡き村長に教えられたものであって実際に何が黒なのかは分からない。

だが、この瞬間、確かに私は色を感じたのだ。

音によってもたらされる硝子細工の世界。その中に確かに他のものとは一線をかいす色のしたものを認識したのだ。

その瞬間、私は『私』になる事を決めたのだ。

その後は簡単だ。『私』となった私は祭に頼みこみ、彼女。私に初めて色をくれた女性、孫策伯符のものに使えさせて貰ったのだ。

もつとも表だってではなく裏にてっしてだが。

しかし、そのほうが私らしくいいのではないか？

何せ民衆も眼の見えない、それでいて殺人に愉悦を抱くような者が政を行っているのは不安だろうし、何より眼の見えない私では書類仕事等は無理がある。

「・・・、いる？」

ああ、また彼女の音が聞こえる。

私は思考を戻すと彼女の背後に姿を現す。

今、彼女は自分の政務室にいる。

彼女が政務室にいるのはかなり珍しいのだが、今はそれも無理はない。

彼女が今から行うのは孫呉が復活するかしないかの戦い。

いくら相手がふ抜けているとはいえ、戦は戦。

油断はせずに用心するの越した事はない。

「・・・、頼めるわね？」

彼女が言うのは、これから起こる戦に当たっての事。

敵の大將、袁術の位置の把握とそれを守る兵の暗殺が彼女の望みだろう。

「無論」

短く答える。

私と彼女の会話はこんなものだ。

だがそれでもいい。

私は彼女の傍に居られればそれでいい。

まあ彼女がどのように思っているかは知らないが。

「では、いつてくる」

「ええ、気を付けてね。……………それで、また私に無事な姿を見せてちょうだいよ……音羽」

私が天井裏に消える間際に彼女、雪蓮が発した言葉。

されが私の真名だ。

『私』に名は無い。

私には真名が在る。

私は彼女、雪蓮の傍に入れる。

私は孫呉の為に動ける。

それだけで私は幸せだ。

感謝しよう、この身をここまで育ててきた全てに

(後書き)

まったくもって何がいいたいのかわからないうえに後半がお粗末
というねww

どうしてこうなったorz

批判とかは覚悟してます。というかまず感想がくるのか疑問ですが
最近こんなのしか書けない。なんでだ……

ではでは、この辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955v/>

真・恋姫無双 孫呉の為に...ていうか雪蓮の為に？いや歪んでるからよくわから

2011年10月8日03時49分発行